

小治政の所因
附録

ル 4
303
7



呂
門 308
號
卷 7



八江款名所圖畫附錄

目錄

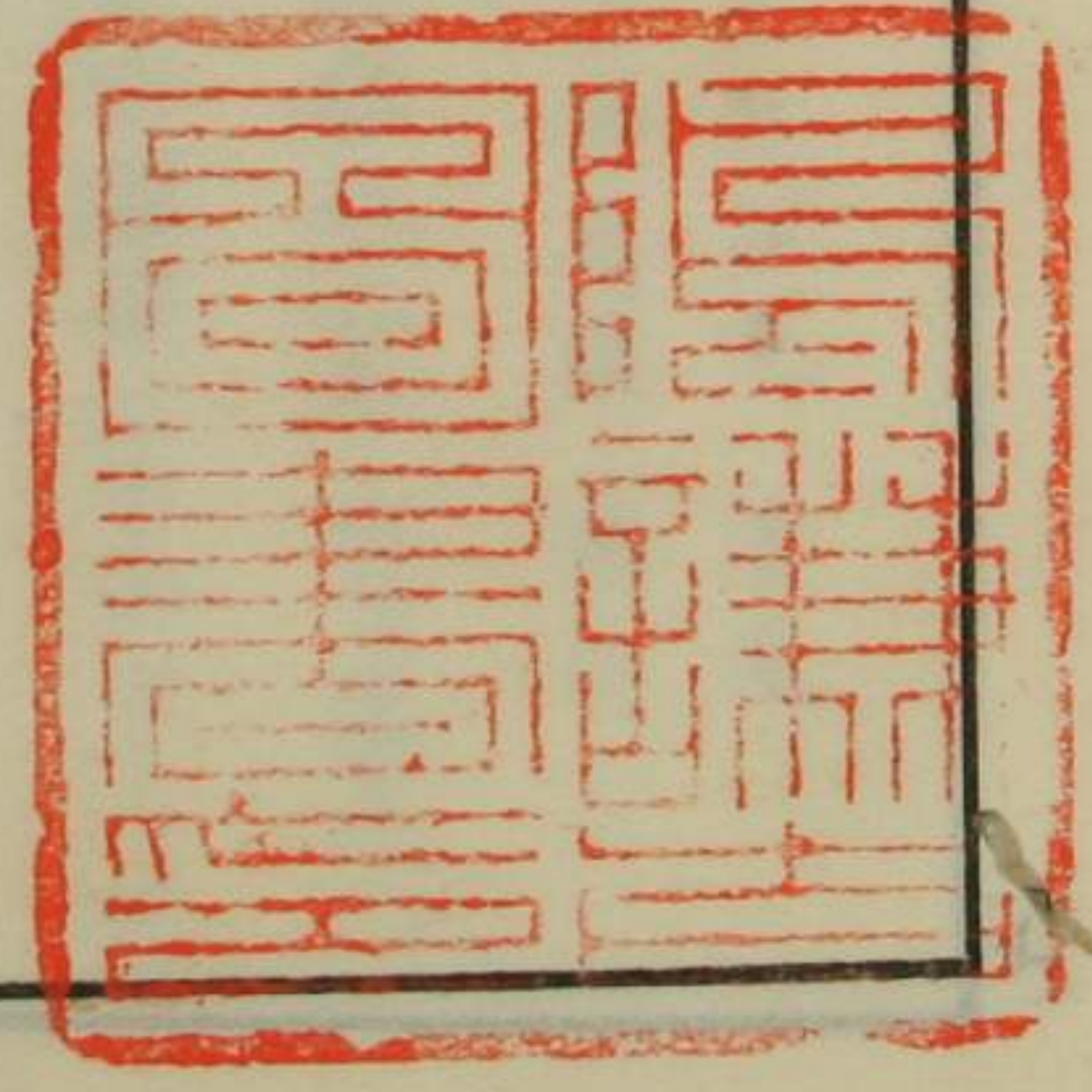
新明倫館

好生館

姚倉廡對

同圖

同圖



文
五
星
藏
反

八江嶽名所圖画附録

木梨恒充 著述

山縣篤藏 補正

新明倫館

弘化三年明倫館御再興嘉永二年正月落成二

月十八日聖廟釋典三月二日諸替古始疆域二丁四方にて
回りの溝渠を作り中央南面に聖廟を立つ觀徳門南門あり
右に講堂あり繼ぎて學生寮及び官吏等の衙局あり右
に諸の武藝の替古場ありて都へて此處を演武場と号す又
乾の方より練兵場あり大砲小銃の替古場ありて操練怠る
ことありて一月六暇を賜ふると五十の日を休日とす

其餘の日ハ朝ハ卯の刻より出て夕ハ申の下刻より下宿す実
ニ廣大の替古場より文武の諸藝怠惰することなく他藩
ニ冠よりと著し

聖廟正壇木主 堅六尺 横三尺 大聖至成文宣王

古明倫館より
遷座

右脇木主 堅四尺 横二尺 袁國復聖公 同 沂國述聖公

左脇木主 同 邲國守聖公 同 鄒國亞聖公

右掛物 程伯子神位 張子神位 朱子神位

左掛物 周子神位 程叔子神位 召子神位

釋典御次第

御外殿 就座 典儀相迎 專理相迎 褰帳 迎神 焚香

總拜 御盥洗 御外壇 祝官進幣 御典幣 御降壇

典儀 焚香 奠供 解釵 齋郎進饌 奏樂 典儀 焚香 初獻介者

初獻盥洗 奏樂 祝文 初獻北面 典儀 焚香 亞獻介者

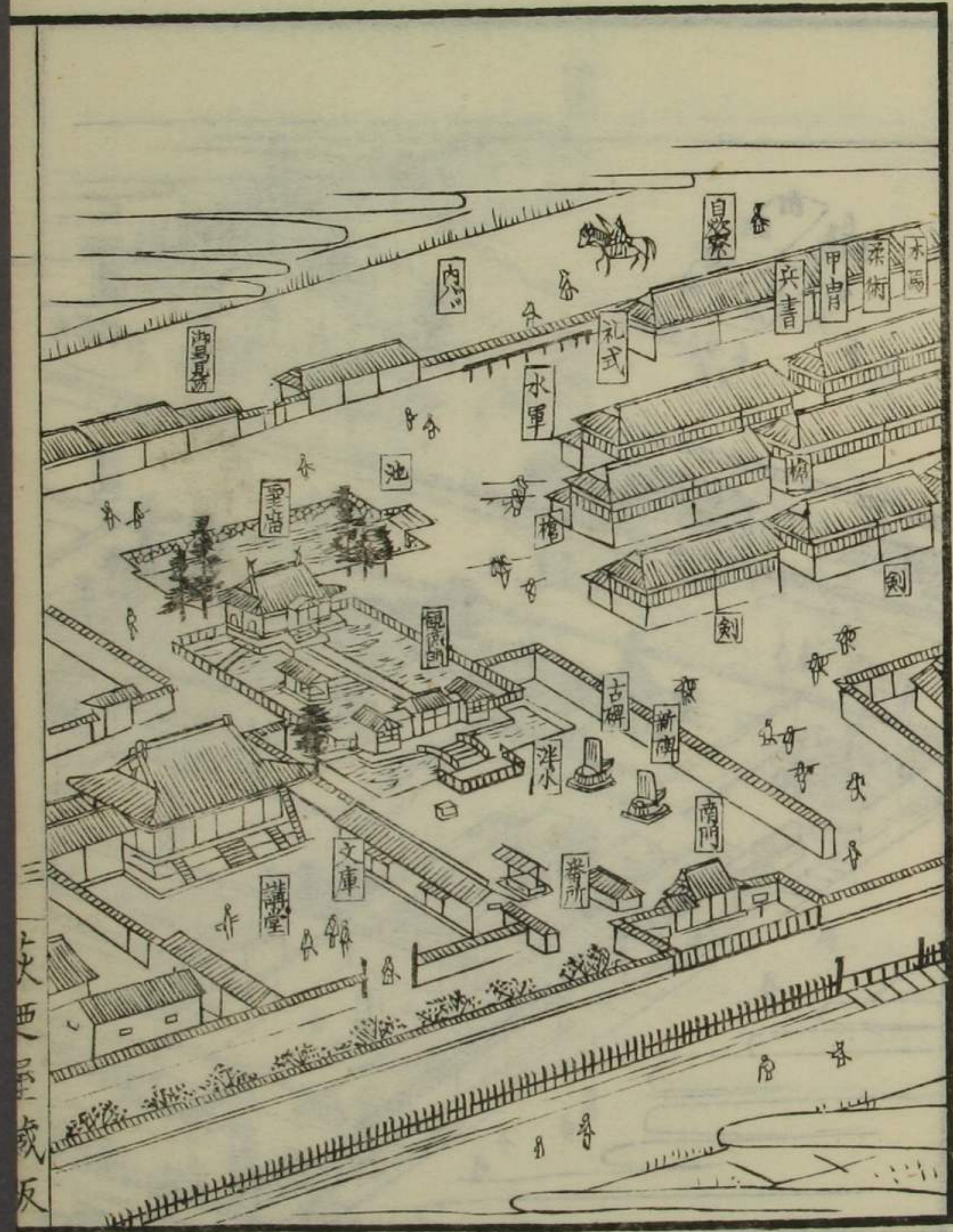
亞獻盥洗 奏樂 亞獻北面 典儀 焚香 終獻介者 終獻

盥洗 奏樂 終獻北面 受胙 初獻北面 初獻介者

初獻 拜 御香拜 御退殿 御仕構 御外殿 胙御頂戴

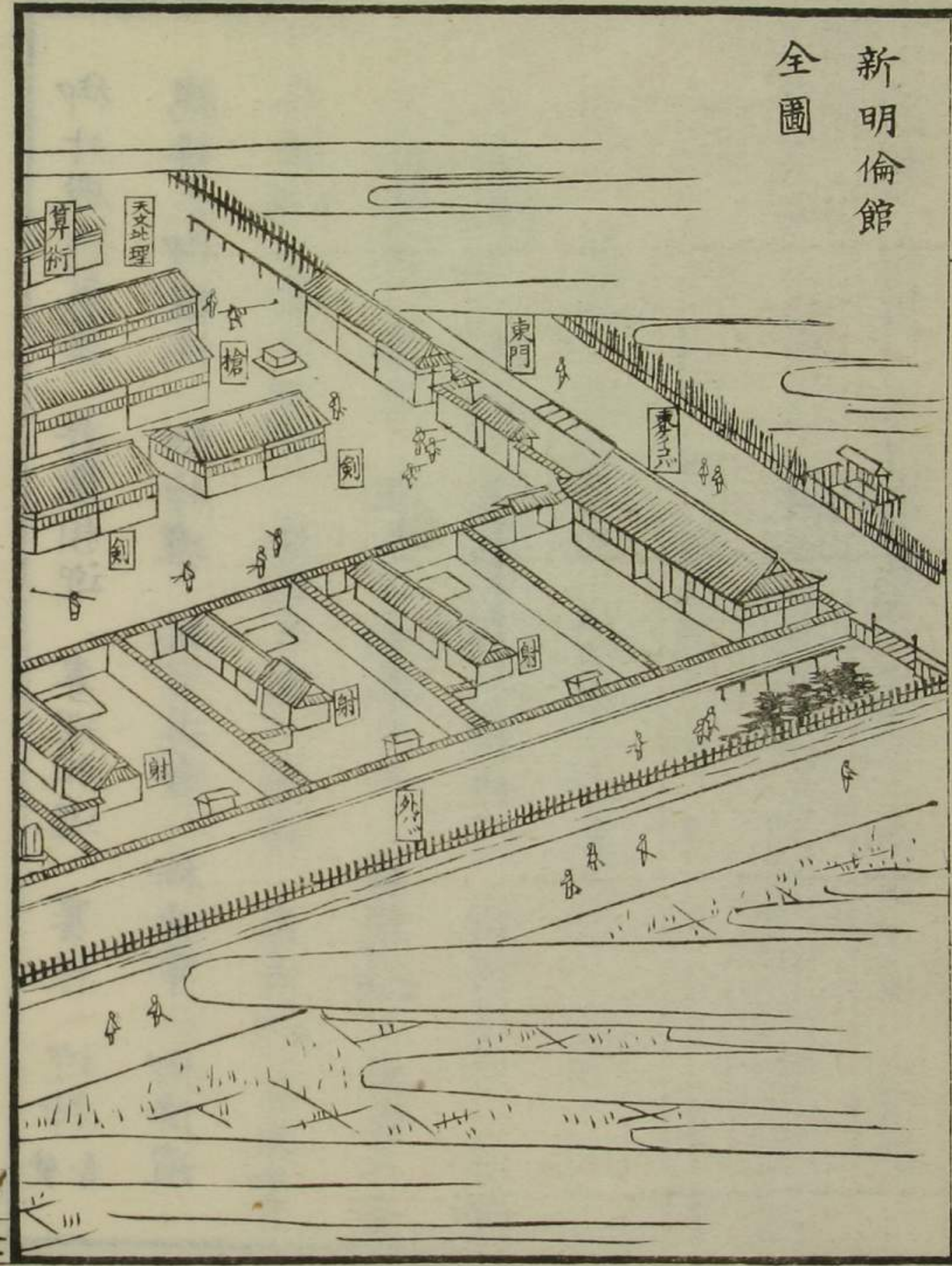
御目見 御歸城 總拜 典儀 焚香 徹供 解釵 齋郎徹饌

奏樂 見臺 講師 徹幣 望瘞 獻官北面 送神 焚香



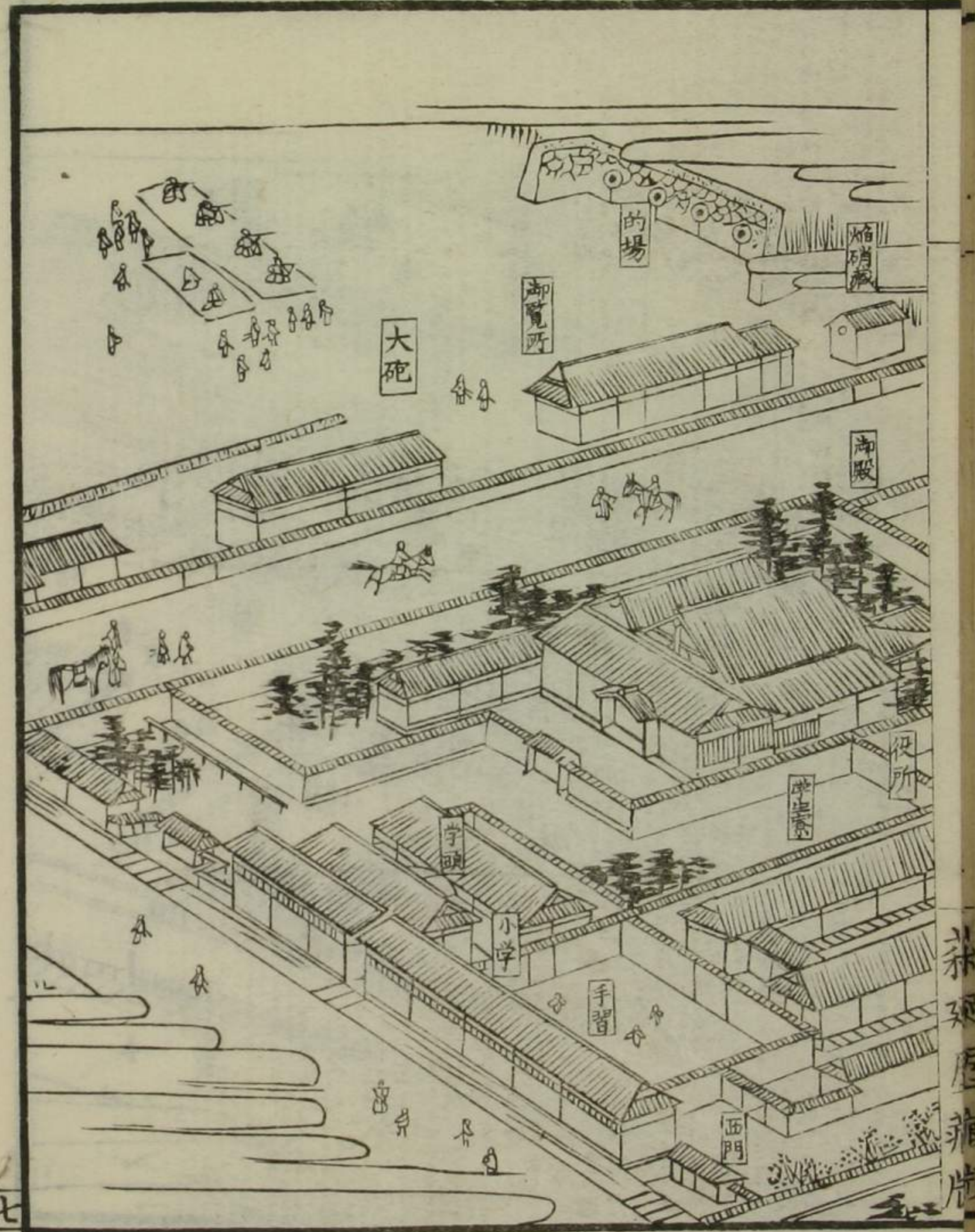
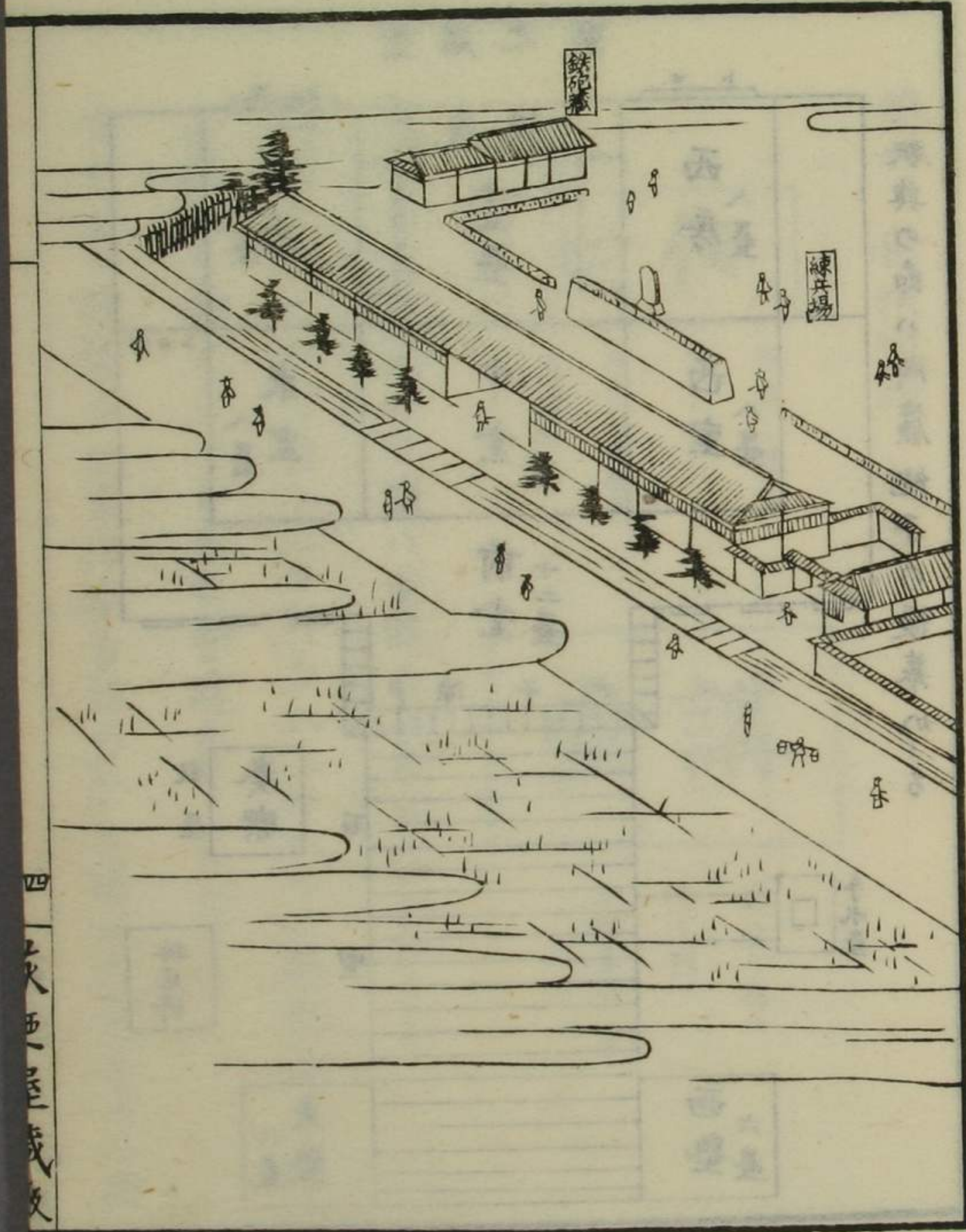
文庫

新明倫館
全圖



新明倫館

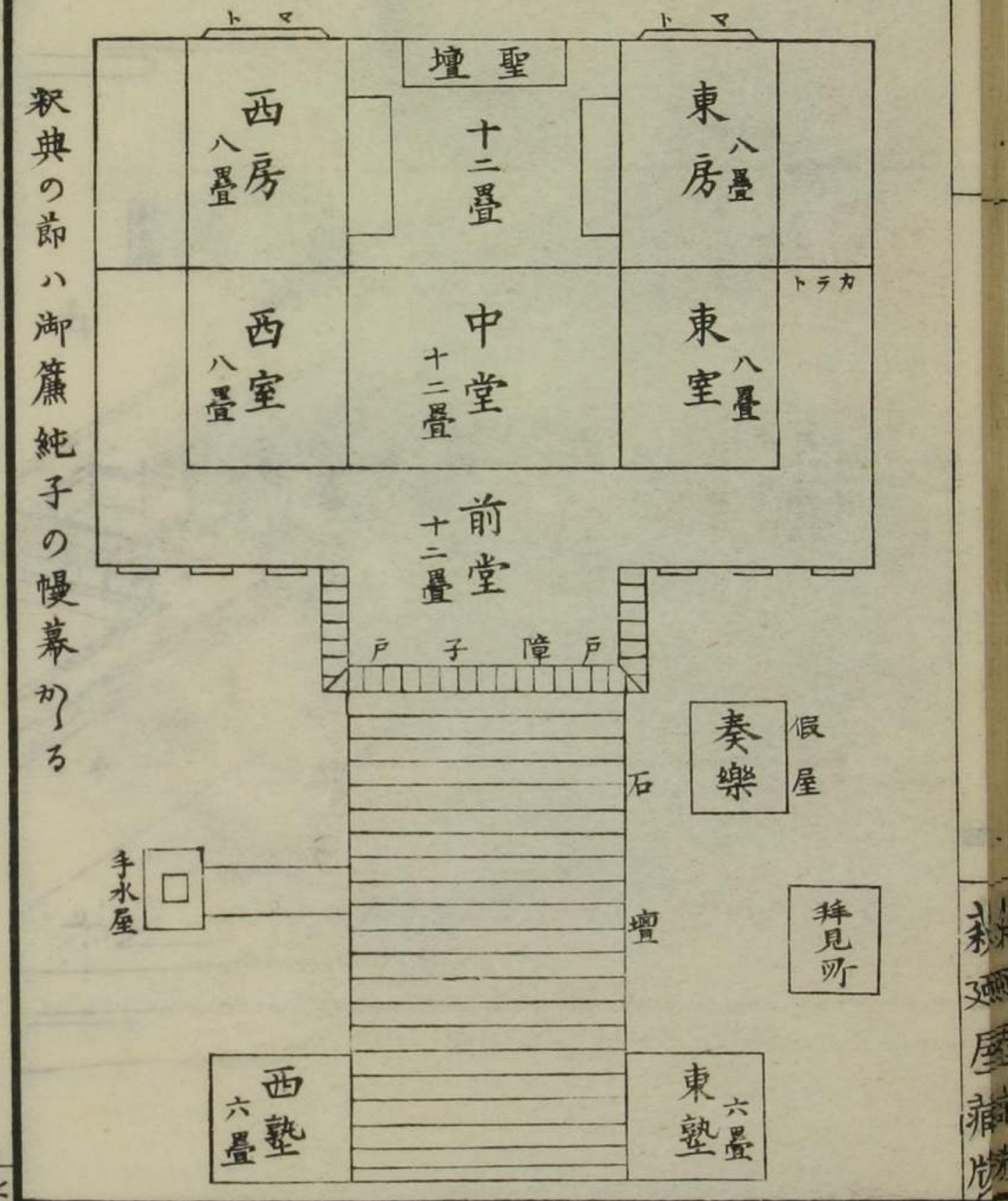
七



四
大砲

練兵場

圖之廟聖



總拜 垂帳徹燭 起坐

心依

聖廟₁掲₃
所の額
有柳川藏仁親王
真跡

講堂

講堂₂掲₃
所の額
山縣真平筆

本門并講堂式臺の額ハ古館の分を用ひられり
講堂₂於てハ一ヶ月十二日即ち二三八の日講叙餘日ハ十
三經より詩文よりくるを會講怠ることあり
堂中₃ハ諸替古掟享保度古館の分を掲げ又新くよ二面

をかめられり又正面の別上學生控の額を掲ぐ 功令額
といふ

學校之設達才成德欲上焉以供國家之用下焉以使有所矜式其若斯也則學問果有益於人歟抑亦芻狗也歟其有裨風教歟抑未歟入將於我乎嘗焉夫讀書學文者將以明經通史長養才德待用於他日不則學雖博乎文雖富乎亦無復所貴矣諸生遊館下三年為一期歷得千有餘日白駒之過可立而竣朝夕孜孜務就功令猶且恐不及焉一日之中遊惰竟時俄失日半三年不下二三百日古者女功一月得四十五日加之以夜之半也勤惰之分有如是者鄙生以一日之長叨居諸生之先今依故祭酒倉君所創少增損定功令凡事无統領責無所歸諸舍推長者一人為舍長進退作息皆聽命而舍長聽命都講都講聽命學長學長聽命先師之靈又立直日一人諸生輪次當直以董學務其制條左具監照勿違

功令

- 一 卯時聞板而興盥嗽結束升堂温讀經書
- 一 辰時聞板下堂入厨會食々畢入舍喫茶
- 一 巳時聞板就業各於其舍若講日則聞板上堂講畢入舍各就其業
- 一 未時聞板入厨會食々畢入舍喫茶除會業外遊息從心若欲出校弁事者告館長廼出館長不在則告都講及酉時必歸若以事留外廢夜業者先具事由請館長所許乃得出去
- 一 酉時聞板就業
- 一 亥時聞板罷業就業若欲卒業者聽及子時不許違且
- 一 直日生一名諸生輪次當直董督當日學務凡業席見設期會板報賓客應酬烟茶諸項皆在所管時々循視列舍警勅廢業
- 一 功令常業外各自別受私業一部臨時請業於館長錄上都講舍板子既已卒業更轉他書亦如之別具一冊逐次載錄每歲六月十二月比

較業書冊子多少以視殿最

一非父母尊長招呼他有緊要事故不得輒出校門出則詢都講及直日
生告學長而後出歸則面學長若都講直日生

元文三年戊午二月朔

學長

演武場一ハ射術場三所粟屋山縣岩崎の師家三軒馬術場二
所藏田折下内藤仙波石黒の師家五軒劍術場四所内藤馬來
平岡北川の師家四軒鎗術場三所岡部横地小幡の師家三軒
其外大砲師家五軒兵學同三軒禮式同二軒水軍同一軒天文地
理一軒甲冑早着同一軒算術柔術無念流劍術等各稽古場
并ニ師家ありて日々稽古断間あり又東ニ當リ一字あり他

七

國の劍鎗修行者試合を多し所とす又遠郡土着の者入舎
自炊の場所あり練兵場一ハ小銃神器陣の訓練大砲周發臺
の稽古日々急ることなり

講堂の北練兵場の南ニ於て公館を設け藩公時々御出あり
て講釋を聽きむひ或ハ武場ニ臨ませし親しく演武を
御覽ありて文武の御奨励遺す所なり

重建明倫館記

天下之事有守舊而不可易者有隨時而可變者其可變者而不變
則因循苟且萎蕪不振其不可易者而易之則舊章頽壞百弊隨之

故如綱常之大經國家之重典固當萬世守之而不易焉至制度文
為時勢或有窒礙者又不可不一新而變通之矣昔 泰桓公之創
明倫館也蓋將大興學以張治化乃量度時宜相地於城門之內以
經營焉而人倫教化之道立而文武造士之法備矣爾來迄今百三
十年列世相承繼志述事文武講習之士日增月多昔之所經營今
也狹隘殆不能容非宏其規模而增其式廓則不得適時勢之宜矣
及 今侯立而不承遺緒宵旰匪懈思以紹明前烈乃命宰臣曰欲
張其末者必厚其本欲遠其流者必浚其源學校者政治之本教化
之源治國之所宜先也而 先公創建規模既備矣今又廓而宏之
豈非繼述之道也邪汝其與有司議之於是執政與有司胥謀乃就
府下中央之地而別擇寬敞之區重營其宮肇工於弘化丙午今春
告成聖廟居中殿堂巍然門塾修整泮水環之結構之壯輪奐之美

於舊有加焉講堂在其西庖厨學舍相次而西東則為演武之場北則
為練兵之區小學有堂肆札有舍天文書算之場騎射調馬之埒亦
盡具焉庖後鑿池蓄水可以習水騎講堂之北設公館為 公臨學
而養老試士之所而四外周以溝塹大門在南以正方面於是學校
之制煥然大備矣而明倫之名不易其舊者何也蓋 先公建學文
武造士其要以明人倫為重也文武之學不本諸倫理則文流於浮
華武陷於暴厲不足以造士矣故凡入學者先以明人倫為基本而
講究文藝精練武事資之以師友勉之以歲月以成其德達其材然
後濟々多士可以贊治裨政而宣風化之美矣糾々武夫可以衛君
禦寇而為邦家之干城矣是固所以建學造士之本意而治化之所
以由行也且建學造士豈獨守其封疆而已哉所以為國家之藩屏
也而其要歸於明人倫則其名館之義不亦至重乎是所謂守舊而

不可易者也若夫堂舎之位置向背學政之條令節目當隨時量宜而相増損焉然則今侯之園重建乃所以俊其可變者而守其不可易者也館成命臣禎為之記禎以承乏學職不得詳謹叙重建之由以繼先臣孝孺之所記云

嘉永二年歲次己酉春三月

館祭酒山縣禎文祥謹撰

館内總地坪數壹万五千八百八十四坪餘

當職 益田刑部

土木專務兼藏元兩人中谷市左衛門

好生館

八丁御殿の東にあり嘉永年間の創建に係り醫

家の子弟入學の所とす講堂學舎悉く備はり漢蘭の醫書講釈課業日々怠ることあり又一ヶ月六日種痘の術を施させ

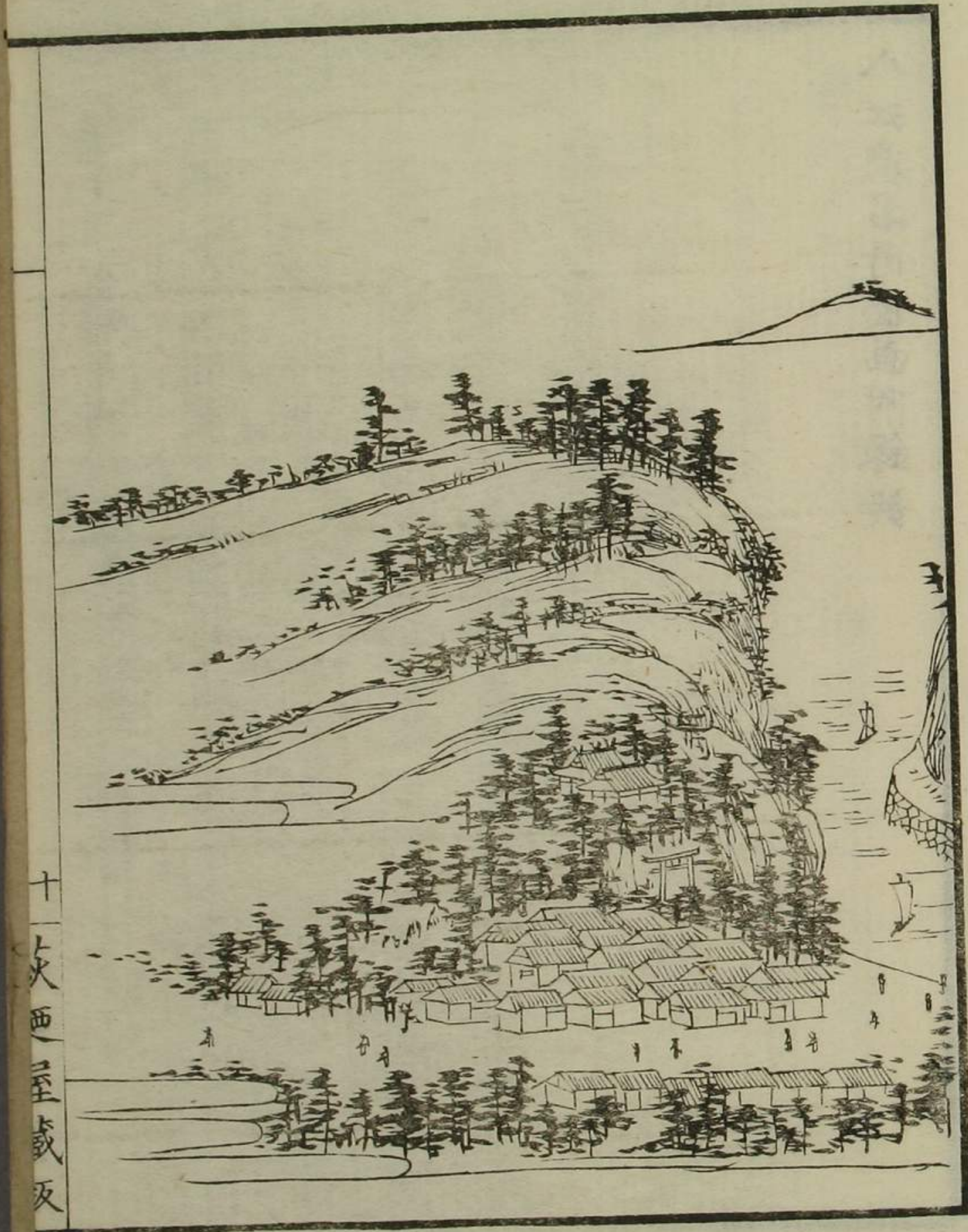
七

られ國內の民其澤を被るもの幾万人といふをあらは実に廣大なる御仁徳といふべし

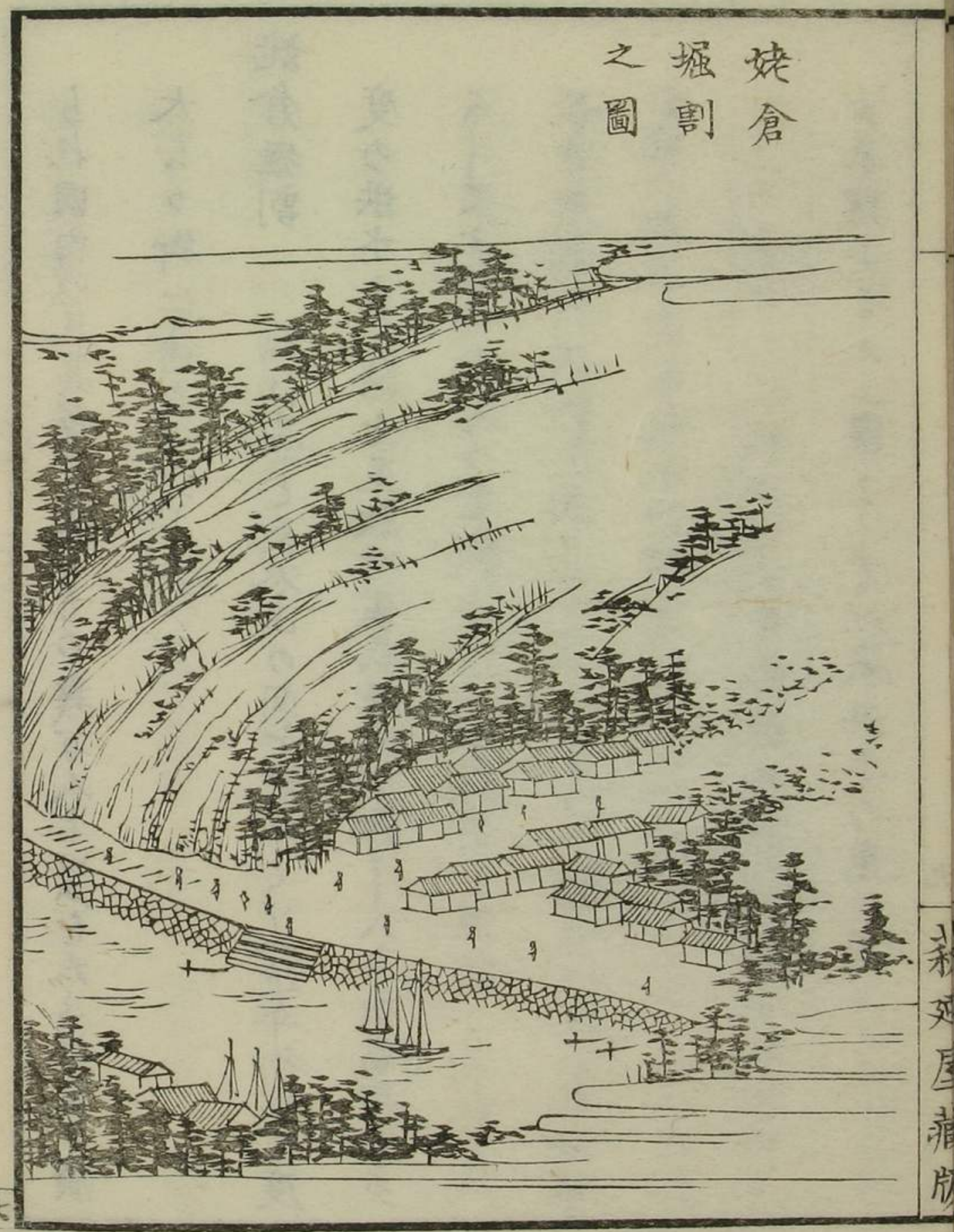
姥倉堀割

鶴江臺と長添山の間を姥倉といふ近年御城下度

度の洪水より諸士屋敷町家民屋共水押し入り田畠損害多くて上下困難せざるを歎くをいふれ此所を堀割り水勢減殺き舟楫の便利を開くせられざる嘉永六年の春歟始安政二年の夏落成せり總長四百拾九間幅十五間役夫大九そ三十壹万人船役二万六千餘艘日數九百餘日を費せり古来稀なる大工事にして以来洪水の患ひ更よるれなく



十
火
西
至
歲
反



燒
倉
之
堀
割
圖

水
林
延
屋
藏
版

七

海よりも深き御遺徳の布と誰う感戴せさしんや

當職 毛利筑前 専務御用掛兼檢使布施虎之助

此明倫館再興好生館新設堦倉堀割の如きは 慶親公

の厚き思召によりて成就しるものこそその教化徳澤

の布と深きれはことに附録と申して一冊はついでに畢りぬ

見ん人こそあらすべし

八江菼名所圖画附録終

本邦大人の此ふとをわかれ壯季はとんりめく讀みしり

一かそのうち三十年あまりに月日然るに其の中大に變

り行て今といつ方よあるやとあらつるのと思ひしり

去年の春本邦能ぬよきをひこのふんのくををと

ひよ父の遺書なまは久しに匣底よ秘ををきたり

とて取り出ためされはわと昔にをを昔にをを

よらるる心りし借り持物りなるとい播まきて讀みしり

よ地形のよる大城はるるに山川原野の景

像神祠佛堂の壯教より四季の遊覽士女の風俗よ

いふ所を以て其の如き出づる古文出づる皇極經世
碑文なるは原の事と撰て入すこれと其の地
よりあるても其の如きいふ所を以て其の如き
いふ所は其の業の如きいふ所と大人とやいふ所
いふ所から学校の如きいふ所と其の如きいふ所
いふ所から其の如きいふ所の如きいふ所の如き
又其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
ありて其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ
いふ所の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の

果ては其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
ありて其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
漸くは其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
りぬれは其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
維新は其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
うなまは其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
城を以て其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
の業を以て其の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の
いふ所の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の如きいふ所の

手を絶つた者も志はゆる人々絶えなくて其研
究に語りあふりの事ゝ家内引礼をその事
も阿武は私人の事ゝなせしる梨も阿武の浦
人採りありたる様も字と具をそりしく
後よりのみなむ

明治二十五年の九月廿日 山縣篤藏志

Faint bleed-through text from the reverse side of the page.

明治廿五年十月三十日 印刷
同 廿五年十一月一日 出版

版權所有

著述者

故

木梨恒克

相續者

木梨皓

群馬縣西群馬郡飯塚村百三十五番地

補正兼
發行

山縣篤藏

東京赤坂區赤坂新町五丁目七番地

印刷兼
發賣者

吉川半七

東京京橋區南傳馬町二丁目七番地

